

秀子▽美空ひばり▽中村メイ

小百合▽和泉雅子▽松島トモ
中山千夏▽四方晴美▽宮脇康
江木俊夫▽水谷豊▽斉藤こず
坂上忍▽キャロライン洋子▽
隆夫▽杉田かおる▽三原順子
麻衣子▽伊藤つかさ▽二階堂
▽高橋良明▽小林綾子▽吉岡
▽中嶋朋子▽見栄晴▽間下こ
▽カケフくん▽伊藤淳史▽山
谷太

久美子▽宮沢りえ▽安達祐実
川範子▽高橋かおり▽坂上香
▽観月ありさ▽前田愛▽花澤香
▽吉野紗香▽野村佑香▽ウエン
英士▽生田斗真▽大島優子
澤まさみ▽鈴木杏▽栗山千明▽
日孝之▽勝地涼▽松本まりか▽

太田省一

子役のテレビ史

早熟と無垢と光と影

子どもらしくから、

「子どものプロ」へ

戦前の高峰秀子から現代の芦田愛菜まで、
天才子役たちはいかにして
大人の俳優へと脱皮したか。

子役のテレビ史

早熟と無垢と光と影

太田省一

星海社

249



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

いま、子役が面白い

これから、子役がたどってきた歴史をできる限り詳細に、そして俯瞰的にたどっていきたい。だが本題に入る前にまず、子役がいかに興味深い存在か、なぜいま子役に注目するのかについてふれておこうと思う。

子どもでありながら子どもではない？～早熟と無垢のあいだ

上杉みちという話題の子役がいる。年齢は6歳。と言っても、実在の子役ではない。お笑いトリオ・ロバートのメンバーである秋山竜次が演じる架空のキャラクターだ。秋山は「クリエイターズ・ファイル」という名のもと、TVプロデューサーやメーカーキャップアーティストなどさまざまな職業や肩書を持つ架空の人物に扮した動画をアップし、面白さとクオリティの高さが評判になっている。その数あるキャラクターのひとりが、子役・上杉みちというわけである。

「映画『星のカクリ』で注目を集め、映画『おばあちゃんの人参ジュース』で数々の賞を総ナメに」し、「子役ブームのトップを走る」というのが上杉みちの設定だ。映像は、秋山が実際はかなり後ろにいて、大人と並ぶとあたかも子どもサイズで小さく見えるように撮っている。みちくんの所属は児童劇団「えんきんほう」、つまり「遠近法」と、シヤレが効いている。

動画は3本立てで、最初の動画はみちくんが出演するドラマ『ライオンのキャラメル』の撮影風景から始まる。「いつでも泣ける」というみちくんが、涙を浮かべるシリアスなシーンに挑んでいる。しかしカットがかかると、母親役の俳優と一緒に遊んでもらったことをあどけない笑顔で話し出す。そして欠かさないという水分補給のため、いつもそばにいるママから水を受け取ると、ペットボトルを一気飲み。

2本目の動画では、芝居にも勉強にも頑張るみちくん、休憩時間に走り回って遊ぶみちくんといったオフショットの素顔が明らかに。そして最後の動画では、セリフのなかの「ケースバイケース」という耳慣れない言葉が上手く言えず、号泣してしまう。だが「僕は負けない」というかつての出演ドラマのセリフを思い出し、気を取り直したみちくんは撮影現場に臨む。

ここには、子役という存在のエッセンスがギュッと詰まっている。大人顔負けの演技はもちろん、撮影以外のところでふと見せるあどけない素顔や「ステージママ」の存在などもそうだが、なんと言っても子役の本質が絶妙に表現されている。

みちくんは、大人顔負けの演技で周囲を唸らせる。演技について聞いてもとてもしつかりとしていて、子どもとは思えないプロ意識を感じさせる受け答えだ。ある意味、マセてもいる。だが一方で、みちくんが演じるのは純粹でいかにも子どもらしい子どもだ。だからオフショットの素顔が同じように純粹で子どもらしいと私たちは安心する。

つまり、子役とは、子どもでありながら子どもではない存在、早熟であると同時に無垢な存在だ。

一見この2つのことは矛盾しているが、子役においてはこの両面が必要になってくる。役柄として無垢さを演じるには、早熟でなければならない。一方で、演じられる無垢さがわざとらしいものであつてはならない。早熟と無垢のバランスを上手く保つことが必要だ。そのあたりを秋山は巧みにデフォルメし、戯画化している。そこになんとなく気づいていた子役のリアリティを目の当たりにさせられて、私たちは思わず笑いを誘われる。

賑わう子役界のいま

いま、そんな子役の世界が面白い。

もちろん、みちくんのようにコントのネタになるからというだけではない。そもそもロバート秋山が「上杉みち」という卓抜なキャラクターを生み出したのも、いま子役の世界が盛り上がっているという確かな事実があるからだ。実際、近年の子役の世界は、次から次へと人気者が登場し、かつてないほどの賑わいを見せている。子役はいま、エンタメの世界においてこれまでにないくらい重要なポジションを占めるようになってきている。その意味で、面白い。

たとえば、NHKの朝ドラや大河ドラマで主人公の幼少時代を演じて評判になる子役も増えた。この後でまたふれるように、そうした現象はいまに始まったことではない。だが、達者な演技によって子役はますます存在感を発揮し、世間を魅了するようになっていく。

朝ドラ『おちよやん』（2020年放送開始）で杉咲花（彼女もまた、子役だったひとりだ）演じる主人公の幼少時代を演じ、評判になった毎田暖乃^のなどは近年の代表的子役のひとりだろう。毎田の演技に魅せられた視聴者は多かったようで、その反響の大きさから同じ『おちよやん』のなかでは別の役柄で再登場することにもなった。さらに『妻、小学生になる』

（TBSテレビ系、2022年放送）では、石田ゆり子演じる大人の女性の人格が身体に宿るという難しい役どころを見事に演じた。場面によって中身が小学生であったり、娘を持つ母親であったりする。それをセリフ回しや表情、仕草で巧みに演じ分ける姿は、またまた世間の喝采を浴びた。

他のドラマで注目される子役も、もちろんいる。

松嶋菜々子が謎めいた家政婦を演じて大ヒットした『家政婦のミタ』（日本テレビ系、2011年放送）では、派遣先の一家の子ども役を中川大志や本田望結が演じた。中川は中学2年生の長男、本田は幼稚園年長組という役柄。バラバラになった家族のなかで悩み、それゆえに問題を引き起こしてしまう子どもをそれぞれ好演し、このドラマをきっかけに2人は一気に人気を集めるようになった。

この本田望結などもそうだが、演技面だけでなくタレントとしても、子役は活躍の場を広げている。あまりに落ち着き払った言動ゆえに「人生2周目？」と驚嘆され、バラエティ番組やCMへの出演も多い寺田心などは、そのひとりだろう。また同じ立ち位置の先輩子役には、芦田愛菜や鈴木福がいる。

芦田愛菜は、俳優業のかたわら有名進学校に通っていることなどから「才女」の評判も

高い。そのイメージを生かし、さまざまな分野に大人顔負けの知識を持つ子どもたちが登場するバラエティ番組『サンドウィッチマン＆芦田愛菜の博士ちゃん』（テレビ朝日系、2019年放送開始）のMCをサンドウィッチマンとともに務めている。またCM出演などもきわめて多く、存在感は日に日に増している。

鈴木福も同様に、俳優であるだけでなく、バラエティ番組出演はもちろんのこと、情報番組や報道番組のコメンテーターを務めるなど活躍の場は多彩だ。スーツ姿の彼を目にすることもめつきり増えた。

ともに2004年生まれの2人はもはや子役という年齢ではないが、現在の活躍が子役時代の共演作『マルモのおきて』（フジテレビ系、2011年放送）などで積み重ねてきた実績のうえに成り立っていることは間違いない。「あの愛菜ちゃんや福くんがこんなに大きく立派になつて」というある種感慨深い保護者のようなまなざしで、多くの視聴者は2人を見守っているはずだ。

従属から自立へ―子役の歴史的变化

どんな名優も、素のまま子どもを演じることはできない。大人の俳優がメイクなどの

助けを借りて老け役を演じることはできる。だが先ほどふれた『妻、小学生になる』の逆パターン、つまり大人の身体に子どもの人格が宿るといった特殊な設定でもない限り、大人の俳優が子どもを演じることはできない。遠近法を利用した上杉みちの撮り方は、それを逆手にとったトリックによるギャグとも言える。

いずれにせよ、そういうわけで子役は映画やドラマづくりにおいていなくては困るものだ。だが別の角度から言えば、子役は「別枠」の扱いで、大人の俳優では現実的に埋められない部分を補うための従属的な存在にすぎなかった。異端的な存在だったと言ってもよい。

しかし、いまや子役は、先ほど述べたように子役のままで終わらず、演技面においても、またタレントとしても、「子役」の領域を越えた活躍を見せるようになった。大人の俳優やタレントのお株を奪うような存在になっている。

かつての子役は、たとえ爆発的な人気を集めたとしても、子役のままで終わるケースが珍しくなかった。結局、芸能界を去ることになった人気子役も少なからずいる。「子役は大成しない」という格言めいたフレーズも生まれた。そこにはしばしば、大人の俳優へと上手く脱皮することの難しさ、それゆえの挫折があった。そして年月を経た後に、メディア

からは「あの人はいま」的な扱いを受ける。そんな悲哀が、子役にはつきまとうていた。

むろん過去にも、子役からスタートして大人になっても第一線で活躍し、大きな成功を収めた芸能人がいなかったわけではない。この後取り上げる高峰秀子や美空ひばり、中村メイコなどはその先達だ。だがその裏には、やはり数多くの挫折した子役たちがいた。とりわけ1960年代から1970年代くらいのテレビの黎明期には、そうしたケースも目立っていた。

ところが、1980年代後半以降、一転して子役の自立が始まった。子役たちは、演技においても、そしてひとりの人間としても自己を主張し、自分で自分の道を切り拓くようになった。後藤久美子や宮沢りえ、そして安達祐実などは、それぞれ生きかたは違えども、みなそうだった。

その結果、多くの子役にとって、「子役」と呼ばれる年齢を超えても第一線で活躍を続ける道筋ができた。いまや子役は、大人の俳優やタレントになるためのひとつの登竜門にさえなっている。

実際、元子役という経歴を持ち、いまでも出演作が絶えない人気俳優は少なくない。ジブリアニメ『耳をすませば』（1995年公開）で声優として主人公の相手役を務めた高橋一生、

『キッズ・ウォー』（CBC、TBSテレビ系、1999年放送開始）に出ていた井上真央、『女王の教室』（日本テレビ系、2005年放送）に出ていた志田未来や伊藤沙莉などは、有名だろう。言うなれば、『子役の長寿化』が始まったのである。芦田愛菜や鈴木福も、こうして開かれた道の上を歩んでいる。

本書の流れ

本書は、日本における戦前から現在までの子役の歴史を、特にテレビにおけるエンターテインメントの歴史、さらには戦後を中心とした日本社会の歴史という両面からたどるところで、そうした子役の自立への変化がいつどのように、なにを背景にして起こったのかを探ろうとするものである。そのなかでは、子役たちが出演した作品だけでなく、「ステージママ」や「子どもの労働」をめぐる問題、また現実社会と作品の双方における家族観の変化といった点にもふれることになるだろう。

以下、本書の大まかな流れを示しておきたい。ちなみに、本書で扱う子役とは、中学生くらいまでの年齢の俳優を指す。ただ、実年齢は中学生でも作品中で高校生を演じる場合やその逆のケースなどについても、必要と考えれば言及するケースがある。

序章では、前史として高峰秀子、美空ひばり、中村メイコなど映画時代の子役を取り上げる。とりわけ、高峰秀子や中村メイコが戦前、そして美空ひばりが戦後直後という時代背景のなかで、どのようにして「天才子役」と呼ばれるようになったか、その経緯を明らかにする。

第1章では、テレビ時代の到来とともに人気を博した子役たちに焦点を当てる。1960年代、児童向けドラマや特撮ドラマが人気になるとともにNHKの朝ドラも始まり、子役の活躍の場もぐんと広がった。特に1960年代から1970年代にかけてホームドラマが隆盛を迎えるとともに、杉田かおるや坂上忍ら子役の達者な演技が注目されるようになる。テレビにおける子役の歴史のスタートである。

第2章は、1980年代に話を進める。やはり『北の国から』（フジテレビ系、1981年放送開始）のようなホームドラマにおいて、吉岡秀隆のような子役への注目が集まる一方で、『3年B組金八先生』（TBSテレビ系、1979年放送開始）のような中学を舞台にした学園ドラマが人気を博し、子役にとっての格好の活躍の場になっていく。伊藤つかさなどが典型的なように、それは同時に子役のアイドル化の始まりでもあった。

子役のアイドル化の流れは、1980年代後半から1990年代にかけていっそう進む。

第3章では、そのなかで後藤久美子や宮沢りえのような、「生意気さ」を魅力とするような“自己主張する子役”が誕生した流れを振り返る。同時に、子役が子役のままで終わらなくなっていく様子を、安達祐実の活躍なども併せてみていく。

第4章で扱う2000年代は、そうした子役の自立を受けて、子役を出発点に人気俳優へと成長する流れが確立されていく時期である。前出の『キッズ・ウォー』の井上真央、『女王の教室』の志田未来や伊藤沙莉、また神木隆之介、福原遥、加藤清史郎のような人気子役の登場を中心に、その様子をたどっていく。

2010年代から現在では、一方でオーディションから上白石萌音・萌歌の姉妹や浜辺美波がデビューし、もう一方で先述した芦田愛菜や鈴木福のような「賢さ」を身に付けた子役が登場するなど、子役の世界が成熟を迎えた時期である。第5章では、その充実ぶりについて改めてとらえ直してみる。

そして結びの章では、そうした子役の世界の成熟に対し、社会全体の子ども観の変化やインターネットの影響などメディア状況の変化がどうかかわるのかを考えてみたい。そのうえで、今後子役はどうなっていくのかについて大まかな見通しも立ててみたい。

それではまず、戦前まで時代をさかのぼってみることにしよう。

はじめに

いま、子役が面白い 3

子どもでありながら子どもではない？～早熟と無垢のあいだ 3

賑わう子役界のいま 6

従属から自立へ～子役の歴史的变化 8

本書の流れ 11

序章

映画時代の子役たち ～戦前から戦後直後まで 25

① 日本映画史最大の子役スター、高峰秀子 26

子役スターを生んだチャップリン映画『キッド』 26

子役からスタートした大女優・高峰秀子 29

子役・高峰秀子の凄み 31

初主演作『綴方教室』 33

『二十四の瞳』と高峰秀子の子役観 35

②「歌う子役」美空ひばりと戦後復興 37

加藤和枝が「美空ひばり」になるまで 37

『悲しき口笛』、『東京キッド』出演で人気歌手に 40

美空ひばりが象徴した希望 42

「歌う子役」の系譜 44

「畸形的」「バケモノ」と批判された子ども時代の美空ひばり 46

③映画からテレビへ ―喜劇専門の子役だった中村メイコ 49

2歳で映画デビューした中村メイコ 49

「出演は喜劇に限る」 50

「子役がキライ」な理由 52

マルチタレントの草分けだった中村メイコ 55

映画からテレビの時代へ 57

第1章

テレビ時代の幕開けと子役

～1960年代から1970年代まで

59

① 映画とテレビの過渡期に生まれた人気子役たち 60

あの吉永小百合も子役だった 60

舞台からタレントへ～中山千夏の道のり 64

児童劇団の歴史、役割の変容 66

② 子ども向けドラマの子役たち 70

「チャコちゃん」でブレイクした四方晴美 70

子役の代名詞的存在だった宮脇康之 72

特撮ドラマの子役たち 75

水谷豊、子役からの軌跡 78

③ 朝ドラ、そしてホームドラマの時代と子役 83

朝ドラが高めた子役への注目 83

朝ドラが生んだ最初の子役スター、斉藤こず恵 85

ホームドラマの時代 88

坂上忍、売れっ子子役から人気司会者へ 90

杉田かおるという実力派子役 93

画期的だった学園ドラマ『3年B組金八先生』 97

アイドル化する子役

～1980年代の発展 99

① 子役の世界を広げた学園ドラマ 100

1970年代学園ドラマと子役 100

『金八先生』がもたらした生徒役のアイドル化 102

『金八先生』から生まれた女性アイドルたち 105

伊藤つかさがきつかけだった子役の労働基準法問題 107

小学校が舞台だった『熱中時代』 110

「ませた子ども」の学園ドラマ、『うちの子にかぎって…』 112

② 1980年代ホームドラマと子役たち 114

『パパはニュースキャスター』の子役史的意味 114

『おしん』小林綾子の「普通の生きかた」 116

子役の「密着ドキュメンタリー」でもあった『北の国から』～吉岡秀隆と中嶋朋子 120

自己主張を始めた子役たち

～1980年代後半から1990年代の転換

133

③ バラエティ番組と子役たち

122

バラエティ番組と子役、その前史

122

欽ちゃん番組から「仮面ノリダー」へ～バラエティで輝いた子役たち

125

『あっぱれさんま大先生』、そしてバラエティ番組が子役に求めたもの

129

① 「国民的美少女」後藤久美子の登場

134

劇団からモデルへ、ドラマからCMへ

134

大河ドラマと「寅さん」で存在感を発揮した後藤久美子

136

「国民的美少女」になった「ゴクミ」、そして美少女ブーム

139

『ゴクミ語録』と子役像の変化

143

②「宮沢りえ」を演じた宮沢りえ 146

初代リハウスガールから『ぼくらの七日間戦争』へ 146

自己主張するキャラクターとしての「宮沢りえ」 148

宮沢りえが巻き起こしたセンセーション 150

観月ありさ、そして「チャイドル」たち 153

③安達祐実という歴史的「天才子役」 158

「具が大きい」が流行語に 158

安達祐実と『家なき子』 160

「子役の後」問題、そして2000年代へ 163

第4章

人気俳優への登竜門となった子役

→ 2000年代の充実

① 2000年代最初を飾った子役ドラマ『六番目の小夜子』 168

ホラーテイストの学園ドラマ『六番目の小夜子』 168

鈴木杏、栗山千明、そして山田孝之『六番目の小夜子』の子役たち① 170

勝地涼、山崎育三郎、松本まりか『六番目の小夜子』の子役たち② 174

② 増える子役出身の人気俳優 177

子役は大人の俳優への登竜門になった 177

池松壮亮と柳楽優弥く2人の子役出身実力派俳優 179

子役の“新世代”、神木隆之介 182

井上真央くホームドラマから大成した子役 184

③ 「自己プロデュース」を始めた子役たち 187

『女王の教室』という、もうひとつの異色学園ドラマ 187

志田未来がたどった道のり 188

福田麻由子の堅実さ、そして伊藤沙莉という新世代子役
バラエティ、CMからブレイクした松岡茉優、福原遥、加藤清史郎
191
195

第5章

成熟期を迎えた子役の世界

～2010年代から現在へ

203

① 2011年の「東宝シンデレラオーディション」

204

「東宝シンデレラオーディション」の歴史
204

歌と芝居の「二刀流」、上白石姉妹
206

漫画・アニメ原作ものと縁が深い浜辺美波
209

② 広瀬すずと清原果耶 ～オーディションが生んだ大物子役

212

広瀬すずがまとう特別なオーラ
212

清原果耶の絶賛される演技力
215

③ 子役がプロ化する時代 〓 芦田愛菜、鈴木福の登場
218

『コドモ警察』というドラマ
218

鈴木福、そして『マルモのおきて』
221

芦田愛菜が体現した子役の成熟
225

2010年代子役ブームと子役のプロ化
229

結びの章
子役が映し出す社会とメディア
235

素か演技かバラエティ番組の子役が求められるもの
236

「人生2周目」の意味〓寺田心の才能
239

大人と子どもの境界の消滅
241

子どもがみな子役になる時代？
245

おわりに
248

参考文献
250

本書で取り上げた子役索引
254

第4章

人気俳優への 登竜門となっ た子役

～2000年代の充実

- ▽長澤まさみ▽鈴木杏▽栗山千明
 - ▽山田孝之▽勝地涼▽松本まりか
 - ▽山崎育三郎▽池松壮亮
 - ▽柳楽優弥▽神木隆之介
 - ▽井上真央▽志田未来
 - ▽福田麻由子▽松岡茉優▽福原遥
 - ▽加藤清史郎▽美山加恋
 - ▽伊藤沙莉▽北村匠海▽吉田里琴
-

① 2000年代最初を飾った子役ドラマ

『六番目の小夜子』

ホラーテイストの学園ドラマ『六番目の小夜子』

後から振り返ると「豪華キャストだったな」と思うドラマがある。いまは有名だが、その時点ではまだ無名であったり一部のファンしか知らなかったりする。そんな俳優が、実はたくさん出演していたというパターンである。特に子役の出る学園ドラマは、そんなことがよく起こり得る。

2000年4月から6月にかけてNHKで放送された『六番目の小夜子』は、まさにそのようなドラマだった。ここに登場していた子役、あるいはまだ年若い俳優の多くがそれぞれに成長して後に俳優として一本立ちし、活躍するようになっていく。ドラマ自体の面白さもあるが、その点でもよく話題になる作品である。

放送時間は週日の夕方午後6時台。この時は「ドラマ愛の詩」というタイトルになっていたが、それ以前は「少年ドラマシリーズ」として有名だった十代向けの放送枠である。

前にふれた高野浩幸出演の『なぞの転校生』もそうだった。いわば子役にとつてのひのき舞台として伝統があるドラマ枠の作品だった。恩田陸の同名小説が原作。学校が舞台ではあるが、ホラーテイストが盛り込まれている。

物語は、ある中学校に代々残る「サヨコ」の言い伝えをめぐる進む。その学校では、3年に一度、男女問わずひとりの生徒が選ばれて「サヨコ」と名乗り、「3つの約束」を実行しなければならぬ。ただし正体を明かしてはならず、その約束を無事果たすことで「サヨコ」は引き継がれていく。そこにある日、「津村沙世子」という「サヨコ」の名を持った生徒が転校してくる。すると、周辺で次々と謎めいた不思議な出来事が起こり始める…、というストーリーである。

もちろん怖いシーンはあるものの、ドラマ全体のトーンは決しておどろおどろしいものではない。物語の軸は、それぞれに思春期の悩みを抱える生徒たちが紆余曲折を経て一歩成長していく姿を描くところにある。ファンタジー色の濃い青春学園ドラマと断言していい。そこに生徒役として、後に有名になる多くの子役が出演していたわけである。

鈴木杏、栗山千明、そして山田孝之『六番目の小夜子』の子役たち①

では、『六番目の小夜子』に中学生役で出演していた面々を順に振り返ってみよう。

まず、元気で活発なバスケット好きの主人公・潮田玲を演じたのが鈴木杏である。

鈴木杏は、1987年生まれで東京出身。両親とともに映画をよく観に行き、家ではトレンディドラマに夢中だったという彼女は、自分からドラマに出たいと言い出した。それを聞いた両親が伝手をたどって事務所を探してくれた（『マイナビ転職』2010年4月30日付け記事）。

1996年の『金田一少年の事件簿』第2シリーズ（日本テレビ系）でドラマデビュー。その翌年の『青い鳥』（TBSテレビ系）で、物語の重要な部分を担う少女役を好演して脚光を浴びた。また2000年からは大塚製薬「ポカリスエット」のCMに出演し、人気を博す。『六番目の小夜子』は、この頃の出演作ということになる。その後もテレビや映画にコンスタントに出演が続けている。役柄も多彩で、演技の幅の広さがうかがえる。『奇跡の人』やシエクスピア劇など舞台にも精力的に取り組んでいるところは、特筆すべき点だ。

次に、謎めいた転校生・津村沙世子を演じた栗山千明。このドラマのもうひとりの主役と言ってもいい。

栗山千明は、1984年生まれ茨城県出身。5歳くらいのとき、子ども番組の体操に出

たいとねだるのを見た親が、彼女を事務所に入れた。それをきっかけにモデルの仕事始めた（『毎日新聞』2007年2月16日付け記事）。

その後『ピチレモン』などローティーン少女向けファッション雑誌のモデルとして活躍する一方、1997年に出版された篠山紀信撮影による写真集『神話少女 栗山千明』が大きな話題を呼んだ。ただそこにはヌードでの写真もあったため、後年出版社による自粛で絶版になるということもあった。

本人はモデルの道を進むつもりだったが、曰く身長が思ったほど伸びず迷っていたところに映画出演の話が舞い込み、それを機に俳優への道を本格的に進むことになる。1999年のことである。それからドラマや映画での実績を積み重ね、主演作も多い。クエンティン・タランティーノ監督の映画『キル・ビル Vol.1』（2003年公開）に出演し、ハードなアクションシーンを披露していたのは、よく知られるところだろう。深作欣二監督『バトル・ロワイアル』（2000年公開）に出演していた彼女を見て、タランティーノが起用したものだ。った。

山田孝之も、メインキャストとして出演していた。このドラマでの山田孝之は、玲の幼なじみである関根秋を演じている。写真部に入っていて、勉強のできるクールな秀才とい

う役どころだ。

1983年沖縄に生まれ、鹿児島で育った山田孝之は、中学3年の冬休み直前に家族とともに東京に引っ越した。上京してすぐに、芸能事務所・スターダストプロモーションにスカウトされた。高校には行かず、当初は役者志望というわけでもなかった。その頃は、演技レッスンやボイストレーニングを受けるかたわら、ファストフード店でアルバイトをする日々を過ごしていた（『上京本』22―25頁）。

ドラマ初出演は、1999年放送の『サイコメトラーEIIJ2』（日本テレビ系）である。それからほとんど間を置かずに『六番目の小夜子』への出演が決まった。そして沖縄を舞台にした連続テレビ小説『ちゅらさん』（NHK、2001年放送）で注目度も高まり、とうとう2003年には『WATER BOYS』（フジテレビ系）で連続ドラマの主役の座を射止めた。現在には演じる役柄の幅の際立った広さ、作品ごとに与える印象の違いなどから「カメレオン俳優」と称されることも多い。

加えて山田孝之が他の俳優と一線を画すのは、常識的な意味での「俳優」であることに執着していないように見えることである。彼にとつて重要なのは、より広い「表現する」という行為だ。「役者という仕事をやってきて、表現することが染み付いているというか。

絵を描いたりもするし、文章をつくるのも面白い。表現することは好きですね。ものをつくっているという感覚は、どれも一緒なんです」(同書、31頁)という本人の言葉は、それを裏付けるものだろう。

したがって山田孝之の活動の幅は、俳優が基本であるにせよ、それ以外にもずば抜けて広い。歌も歌えば、自分がメインのバラエティ番組にも出演する。本も執筆する。また俳優業のなかでも、正統派のドラマはもちろんのこと、『山田孝之の東京都北区赤羽』(テレビ東京系、2015年放送)のようなフェイクドキュメンタリー風の異色ドラマにも出演する。

そこに、「自己プロデュース」というキーワードがひとつ浮かび上がる。自分という存在を媒介にして、とにかく表現すること。そしてそれを通して自分という「作品」をつくっていくこと。そのことに人一倍貪欲なのが山田孝之だろう。そしてこの「自己プロデュース」は、おそらく2000年代以降、子役という存在全般のなかに芽生えてきた重要なベクトルでもある。その点についてはまた後で述べるが、山田孝之は、そうした子役の新しい生きかたを示した先駆的存在と言えるはずだ。

勝地涼、山崎育三郎、松本まりか『六番目の小夜子』の子役たち②

ほかにも『六番目の小夜子』には、現在活躍する俳優が中学生役で出演していた。

山田孝之演じる秋の弟、唐沢由紀夫を演じたのが、勝地涼である。秋と姓が違うのは、両親が離婚して秋は母親、由紀夫は父親のもとで暮らしていたからである。やはり玲の幼なじみでもある。

勝地涼は1986年東京生まれ。元々Kinki Kidsの大ファンでジャニーズ事務所に入るのが夢だった。子役になろうと思ったのも、Kinki Kidsのメンバー・堂本光一の主演ドラマ『P.S. 元気です、俊平』（TBSドラマ系、1999年放送）に触発されたのが直接のきっかけだったことを本人が語っている（『A Studio』2020年9月4日放送など）。

その後、芸能事務所にスカウトされて芸能界入り。ドラマデビューした後、2000年放送の『永遠の仔』（日本テレビ系）で主演の渡部篤郎の少年時代を演じて注目された。『六番目の小夜子』も、ほぼ同じ頃の作品である。

高校時代には、周りの同世代の俳優が活躍するのを見て焦りなどもあったようだ。だが山田孝之から「そうやって横を向いている時間があつたら、自分で上を見てそっちを目指したらいんじゃないの?」といった助言もあり、一歩ずつステップアップしてきた（『チェ

リー』2016年3月18日付け記事）。貴重なバイプレーヤーとして存在感を發揮。連続テレビ小説『あまちゃん』（2013年放送）のキザな前髪クネ男役は、出番はほんの一瞬だったにもかかわらず強烈なインパクトを残した。最近主演作も増えてきている。

この作品の勝地涼も初々しいが、その点では山崎育三郎も同様だ。

このドラマでの山崎育三郎は、玲の同級生・加藤彰彦。メガネが印象的な、いわゆるガリ勉タイプである。劇中ではいつも成績を気にし、勉強のできる沙世子にライバル心を燃やす。まだ幼さが残る風貌ということもあるが、ぱっと見だと山崎であるとは気づかないほどである。

山崎育三郎も勝地涼と同じく1986年東京生まれ。彼が芸能界に入ったきっかけは歌だった。野球少年だった山崎だが、人前に出るのが極度に苦手だった。それを知る母親が、ミュージカル『アニー』の「トゥモロー」をきれいに歌っているのを見て小学生の頃に彼を音楽教室に通わせるようになった。そして中学1年生のときに3000人のなかからオーディションに合格し、『アルゴミュージカルフラワー』の主演を務める（『A+Alpha』2014年10月30日付け記事）。その後高校、大学と音楽学校に進み、現在は『モーツァルト!』で帝劇主演を果たすなどミュージカル界のスターであるのは知られる通りである。

近年はドラマでの活躍も目を見張るものがある。連続テレビ小説『エール』（NHK、2020年放送）や大河ドラマ『青天を衝け』（NHK、2021年放送）をはじめ、多くの作品に出演。またトーク番組『おしゃれクリップ』（日本テレビ系、2021年放送開始）のMCも務めるなど、最近の仕事の幅を広げているのも目立つ。ただ山崎育三郎の場合、仕事の中心はやはりミュージカルをメインとした舞台にある。その点は、前述の中山千夏など、舞台出身の子役の系譜を継ぐ存在と言えるだろう。

最後にもうひとり、松本まりかもこのドラマに出演していた。演じたのは、しっかり者のクラス委員長・花宮雅子役。玲のバスケットボール仲間であり、親友でもある。

1984年生まれで東京出身の松本まりかは、15歳のときに原宿でスカウトされて芸能界入り『大手小町』（2018年10月25日付け記事）。この『六番目の小夜子』が俳優としてのデビュー作でもあった。その後ドラマ・映画出演はもちろん、雑誌モデルや声優などの仕事もしたが、いわゆる下積みの時期が長かった。その間、18歳ごろから1年半ほどのあいだ、俳優の松田美由紀の家に居着いていたこともあったという（『人生最高レストラン』2021年9月11日放送）。

自ら「暗黒の時代」とも呼ぶ下積みから抜け出すきっかけになったのが、2018年放送のドラマ『ホリデイラブ』（テレビ朝日系）だった。そこで演じた役柄が「あざとかわいい」

と評判を呼び、ブレイクを果たす。その後は多くの話題作や人気作に出演、主演も務めるようになった。

② 増える子役出身の人気俳優

子役は大人の俳優への登竜門になった

『六番目の小夜子』は、ホラーテイストを織り交ぜつつ、この年代でなければ出せないはかなさや瑞々しさが表現された作品である。脚本や演出とも相まって、そのことがいまもファンの多い作品であることにつながっているのだろう。また主役以外にも生徒それぞれに見せ場が用意されていて、その点が現在活躍する俳優たちの若かりし頃を振り返るのに格好のドラマにもなっている。

とはいえいま見てきたように、すべての子役たちが『六番目の小夜子』出演以降順調だったわけではない。現時点ではみな成功していても、そこまでの道のりはひとそれぞれであり、順調にステップアップした場合もあれば、苦労を重ねた場合もあった。

このようにキャリアがバラバラであるということは、子役というもののたどる決まったルートが崩れ始めたということでもあるだろう。たとえば、いまふれた6人のなかに、児童劇団出身という子役はいない。2000年代以降であっても児童劇団出身という子役はもちろん珍しくないが、それでもひとつ時代が変わった印象がある。

そこには、児童劇団の変質もある。教育目的という当初の理念はますます弱まり、前に書いたように児童劇団はテレビに子役を供給するシステムのなかに組み込まれた。その意味では、芸能プロダクションと同列の存在になった。芸能プロダクションが自らの一部門として児童劇団（子役部門）を運営するケースも多い。その意味では、昭和の子役とは、児童劇団出身であることの内実が大きく変わってしまったのである。

そうなると同時に、俳優の世界において子どもと大人の違いはどんどん曖昧になっていく。それは結局、従来あった「子役らしさ」の観念が崩れ始めることにつながる。それまで子役とは、外見においても性格においても小さく純粋な「子どもらしさ」を表現することを求められる、ある意味特殊な職能であった。その意味において、大人の俳優とは厳密に区別された特別な存在、こう言つてよければ異端の存在であった。「天才子役」という称賛のフレーズには、その根底には「子どもであるにもかかわらず大人のような演技をする」

といったような、子役を特別視するまなざしが隠されている。それゆえ子役は、外見的にも精神的にも子どもの時期を過ぎれば、芸能の世界において行き場がなくなってしまうことも珍しくなかった。それが、「子役は大成しない」という「常識」となつてもいた。

しかし2000年代、そのスタートを飾った『六番目の小夜子』に出演した子役たちが体現したように、子役は特別な存在、異端的な存在ではなくなっていく。子役と大人の俳優のあいだに絶対的な線引きはない。その結果、子役時代は、大人の俳優になるための有力なステップ、ひとつの登竜門になっていくのである。たとえば、学園ドラマ『花より男子』（TBSテレビ系、2005年放送開始）の花沢類役でブレイクする小栗旬（1982年生まれ）も、大河ドラマなどに出演した子役だった。このように、人気若手俳優が子役出身というケースも、この頃を境によく目に付くようになる。

池松壮亮と柳楽優弥ゝ2人の子役出身実力派俳優

池松壮亮もそうした俳優のひとりだ。

1990年生まれ、福岡県出身の池松壮亮のデビューは、劇団四季のミュージカル『ライオン・キング』。10歳のときに親のすすめでオーディションを受け、ヤングシンバ役に選

ばれた。当時彼は野球少年で演技の仕事に興味はなかったと言うが、その後も児童劇団に所属しながら子役の活動を続けた（『CREA』2013年2月22日付け記事）。

その経歴は華々しいものである。映画初出演が、ハリウッド映画『ラストサムライ』（2003年公開）。彼は、主演のトム・クルーズ演じる主人公とところを通わせる少年・飛源を演じた。また2005年公開の映画『鉄人28号』では、オーディションで1万人超のなかから主人公・金田正太郎役を勝ち取る。ほかにも大河ドラマ『義経』（NHK、2005年放送）に少年期の源頼朝役で出演している。

高校まで福岡で過ごした池松壮亮は、日本大学芸術学部映画学科入学を機に上京する。選んだのは監督コース。俳優コースではなかったのは、周囲の俳優から「俳優はただのコマであれ」と言われたことに納得が行かず、俳優という職業に少し距離を置こうとしたからだだった。しかし他方で（俳優に）片足突っ込んだのに今さら抜くのはダサいかな」という思いは根底にあった（『Smoke』2019年1月1日付け記事）。そして大学卒業後は再び俳優業に専念し、『宮本から君へ』（2019年公開）でキネマ旬報主演男優賞に輝くなど、充実した活躍を続けている。

同じ1990年生まれで、やはり子役の経歴を持つのが柳楽優弥である。

東京出身の柳楽優弥は、子役になった動機が少し変わっている。元々「人を笑わせたい」という願望のあった彼は、中学1年のとき同級生が出ているドラマを見て「これだ」と思い、母親に頼んで芸能事務所・スターダストプロモーションのオーディションを受けて合格した『ORICON NEWS』2018年8月29日付け記事）。後に映画『浅草キッド』（2021年公開）でビートたけし役を熱演したのも、この動機を知らなければうなずけるところである。

ただ、初のオーディションにして初の主役に選ばれた是枝裕和監督の映画『誰も知らない』（2004年公開）は、とてもシリアスな作品だった。母親に置き去りにされ、自分たちだけで生きていかなければならなかったきょうだいの長男というのが、柳楽優弥の役どころだった。しかも彼は、その目力も相まった印象的な演技でカンヌ国際映画祭最優秀主演男優賞を史上最年少で受賞。まさにセンセーショナルなデビューであった。

ただその後も映画やテレビへの出演があったものの、2008年から2年間ほとんどとど休業していたような時期があった。その間、処方薬の過剰摂取で病院に運ばれたという報道もあった。

だが2010年の結婚、さらに父親になったことなどをきっかけに、俳優業に本格復帰。蜷川幸雄演出の舞台『海辺のカフカ』（2012年）などを経て、映画『ディストラクション・

ベイビーズ』(2016年公開)では、キネマ旬報主演男優賞を受賞した。その後も彼ならではの存在感あふれる演技で映画、テレビなど活躍の場を広げている。将来は番組のMCをやってみたいという、本来のお笑い好きな一面を感じさせる夢も持っている。

池松壮亮と柳楽優弥。この2人に共通するのは、子役から大人の俳優へとなっていく際にブランクがあったことである。それぞれ外側からは窺い知れない苦労もあっただろう。ただし、いずれにしても彼らは俳優であることをやめなかった。そして押しも押されぬ実力俳優になった。子役は子役のまままで終わることはなかったのである。

子役の『新世代』、神木隆之介

他方で、子役としては彼らと少し異なる印象を受けるのが神木隆之介である。

埼玉県出身の神木隆之介は1993年生まれ。2歳のときに、セントラル子供劇団に入った。神木は出生時に大病を患った経験があり、親が生きている証として映像や雑誌に載った姿を残したいと思ったからだという。同年、早速CMでデビュー。おもちゃのCMだったが、目的を果たした親が「もうやめてもいいよ」と言ったが、神木隆之介自身が「続ける」と言ったため子役を続けることになった(『日経エンタテインメント!』2020年11月23日付け記事)。

1999年には、『グッドニュース』（TBSテレビ系）でドラマに初出演。2004年には、映画『お父さんのバックドロップ』で主演（宇梶剛士とのダブル主演）を務め、同じく『妖怪大戦争』（2005年公開）では、日本アカデミー賞の新人俳優賞を獲得した。そして14歳のとき『探偵学園Q』（日本テレビ系、2007年放送）において、連続ドラマ初主演を果たす。その後も俳優として順調にステップアップし、2023年放送予定のNHK連続テレビ小説『らんまん』では、主演を務めることになっている。

神木隆之介が「役」を演じることの面白さに目覚めたのは、小学校3、4年生のあたりだった。ただ、年齢を重ね思春期を迎えたりすると、声や容姿も変化する。だが神木は、そうなくても不安を感じることは「まったくなかった」という。彼はこう語る。「子役のイメージってどうしてもありますよね。『あれ？ 鈴木福くん、こんなに大きくなってる』とか『芦田愛菜ちゃん、高校生!』とか（笑）。でも僕はその頃、本当に何も考えてなかったです。驚くほど。『いただいた仕事を頑張るんだ』って、のんきに台本を受け取って、『今度はこんな役かあ』なんて、楽しみながら取り組んできたので」（同記事）。

こうしたところからも、神木隆之介は、子役の“新世代”を代表するひとりだと思える。彼にとって、それまで多くの子役がぶつかってきたような、俳優であり続けるための試練

はあつてないようなものだった。むろん演じる作品ごとの演技の悩み、それを乗り越えるためのたゆまぬ努力はあつたに違いないが、子役と大人の俳優とのあいだにある壁という意味での困難は、この言葉からは感じられない。「フワフワッと現場に入ります」という神木の言葉が、すべてを物語っている（同記事）。

井上真央くホームドラマから大成した子役

もちろん、昔からのパターンで子役がブレイクするケースもあつた。

何度か述べたように、ホームドラマは1970年代の杉田かおるや坂上忍をはじめ有名子役を輩出してきたジャンルである。その流れはずっと続いた。たとえば、1990年代後半では、大阪の下町を舞台にしたNHK連続テレビ小説『ふたりっ子』（1996年放送開始）に主人公の幼少期役で出演した三倉葉奈と佳奈の双子の姉妹、「マナカナ」が大人気となった。1986年大阪生まれの2人は、これがなんとデビュー作だった。また、「月9」枠で放送された『人にやさしく』（フジテレビ系、2002年放送）は、香取慎吾ら3人の独身男性がふとしたことで小学生の男の子を育てることになる異色のホームドラマ。その男の子を演じたのが須賀健太（1994年生まれ）で、彼はこの作品で子役としてブレイクした。

その系譜に連なると言えるのが、井上真央である。

井上真央は、1987年横浜生まれ。4歳のときに、母親のすすめで劇団東俳に入った『タレントデータバンク』2005年11月1日付け記事）。同劇団は、1964年創設。工藤静香や雛形あきこ、近年では新川優愛や浅利陽介などが所属していた。井上は、5歳のとき『真夏の刑事』（テレビ朝日系、1992年放送）でデビュー。以降、『藏』（NHK、1995年放送）で主演の松たか子の少女期を演じるなど、多くのドラマや映画、CMに出演した。

その存在が広く知られるようになったのは、『キッズ・ウォー』（CBC、TBSテレビ系、1999年放送開始）からである。昼の帯ドラマで、再婚同士の夫婦とそれぞれの連れ子たちの家族の絆と子どもの成長を描いたホームドラマ。井上真央は、子どものひとりである茜役を演じた。活発で、曲がったことが嫌いな性格。理不尽なことがあると、「ざけんなよ！」と相手に挑みかかる。人気作となりシリーズ化されてからは主人公となって淡い恋模様も描かれたところからも、当時の井上の人気ぶりがうかがえる。

さらに井上真央を一躍人気スターに押し上げたのが、前出の学園ドラマ『花より男子』である。同名人気漫画のドラマ化で、井上は主人公の牧野つくしを演じた。松本潤演じる道明寺司や小栗旬演じる花沢類らイケメン高校生たちとの恋愛模様は、若者を中心に大き

な話題を呼び、続編、さらに映画版もつくられるほどの人気シリーズになった。

さらに、連続テレビ小説『おひさま』（NHK、2011年放送）と大河ドラマ『花燃ゆ』（NHK、2015年放送）とともに主演。また『八日目の蟬』（2011年公開）で日本アカデミー賞最優秀主演女優賞も獲得し、いまや折り紙付きの実力派である。

井上真央は、子役から始まって俳優として大きく飛躍した。その順調すぎるほどのステップアップよりは、この世代の子役出身者のなかでも目立つと言っていないだろう。

一方で、俳優養成をメインとする児童劇団出身というところには、子役の古き良き伝統を感じさせる。『NHK紅白歌合戦』（2011年）の司会などはあるが、これは朝ドラヒロインを務めた流れでのもの。ドラマや映画以外の仕事はそれほど多くなく、やはり俳優一筋という印象だ。

ただ、かつての子役と違うのは、井上真央もまた、本章で取り上げてきた多くの子役出身者たちと同様に、自然体な姿勢で俳優を続けた点である。大学進学のため一時休業したことはあるが、そのことが逆に俳優という職業を人生の流れのなかで自然にバランスよく選択していることをうかがわせる。むしろそのベースには、彼女の卓抜な演技力があることとはいうまでもない。

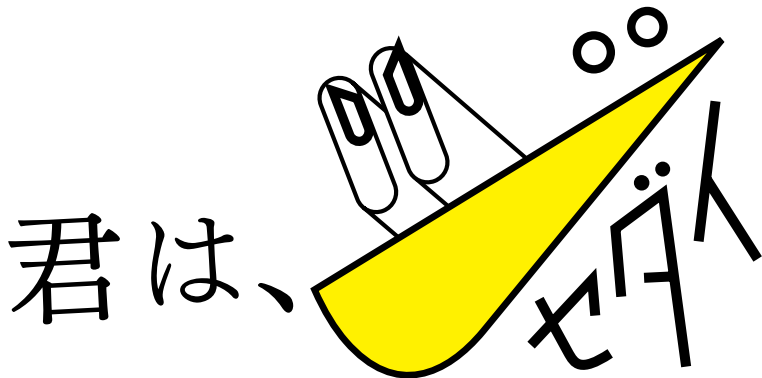
③「自己プロデュース」を始めた子役たち

『女王の教室』という、もうひとつの異色学園ドラマ

ホームドラマと並んで学園ドラマも、子役にとって世間からの注目を浴びる絶好の機会であることは変わらない。前述の『六番目の小夜子』も一風変わった学園ドラマだった。そして2000年代中盤、もうひとつの一風変わった学園ドラマが世間の注目を浴びた。『女王の教室』（日本テレビ系、2005年放送）は、主演の天海祐希が小学校の教師を演じる学園ドラマである。

と言っても、天海演じる阿久津真矢は、学園ドラマにありがちな熱血教師ではない。むしろ真逆の冷徹な鬼教師である。いつも黒ずくめの服装。無表情で、クールそのもの。笑顔を見せることなど決してない。生徒に優しく寄り添うなどもつてのほか、むしろ生徒に闘いを挑む教師である。

『家政婦のミタ』などで知られる遊川和彦の脚本らしく、建前的な良識やモラルを真っ向から否定するような内容は、PTAなどからの批判を招いた。だが一方で阿久津真矢の生



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!